

毎日新聞 19<sup>th</sup>.Sep 1973

### 放浪者の鎮静

前衛画家が、二年半ぶりにサンフランシスコから二度目の帰郷、個展を開いた。ハブニングをはじめとして、九州の美術界で起こったさまざまな芸術運動のスクन्दルをすべて引き受けてきた画家である。いや、画家と単純に呼ぶよりは放浪芸術家といった方がぴったりするかも知れない。

アメリカでは黒人街のど真ん中に画家コミュニオンをつくり、白人や外国人が殺されるあの黒人騒動の最中でも、ゆう然と暮らし絵を描いてきた。日本にしようがどこに住もうが常に底辺へ向けて心を開いてきたこの人の愛の姿勢というか、持物は削り捨てて生きようとする放浪者の魂がそれを可能にしたというべきだろうか。

並んでいる約三十点の絵は、見ている人を不思議な陶醉に導く。「飛行する女」「マンガラ」「女の旅」「抱かれたキリスト」一群像や女たちの、瞳（ひとみ）が異色である。“飛期（ひしょう）の可能性を秘めた人間像”とでも呼んだらいいのだろうか。面白いことに、まるでぬり絵でも描く調子でべったりぬられている。そのくせ透明な色だ。描くたびに手慣れてくる画家のテクニックをあえて拒否してしまっている。そこにこの人の確信がうかがえるようだ。鎮静さえ感じさせる不思議な絵である。

近々、今度はパリへ出かける。それもジープにゴムぞうり姿だ。九州とパリを結ぶ芸術家村をつくるためだという。ふっとうするような情念が要求される運動者の側面と孤立して描かねばならぬ画家の作業、矛盾する二つの地点に自ら身を投げながら。ニューロマンを切り開いていく異色の画家である。

24日まで、福岡市博多区川端町 ギャラリーふくだ